
劍客春秋親子草
おやこ けん ぼう
母子劍法

鳥羽 亮



幻冬舎 時代小説 文庫

劍客春秋親子草

母子劍法おやこけんぼう

【主な登場人物】

千坂彦四郎ちさかひこしろう——一刀流千坂道場の道場主。

若い頃は放蕩息子ほうとうしこであったが、千坂藤兵衛と出逢い、剣の道を歩む。藤兵衛の愛娘まなむすめ・里美と世帯をもち、千坂道場を受け継ぐ。

里美さとみ——父・藤兵衛に憧れ、幼いころから剣術に励み、「千坂道場の女剣士」と呼ばれた。彦四郎と結ばれ、一女の母となる。

千坂藤兵衛ちうべえ——千坂道場の創始者にして一刀流の達人。早くに妻を亡くし、父娘の二人暮らしを続けていたが、縁あって彦四郎の実母・由江ゆゑと夫婦めおととなる。

由江よしゑ——料亭「華村」はなむらの女将おかみ。北町奉行と理無わりない仲となり、彦四郎をもうける。

目次

第一章	道場破り	7
第二章	鬼斎流	59
第三章	食客	109
第四章	襲撃	155
第五章	若君指南	212
第六章	雷落し	263

第一章 道場破り

1

ヤッ！ ヤッ！

道場内に、おんなのこ女兒の気合がひびいた。

お花は大人のようにたんばかまも短袴の股だちを取り、懸命に木刀を振っていた。手にしているのは、父親のちさかひこしろう千坂彦四郎が、お花のために作ってやった二尺ほどに短くした木刀である。

お花は七歳（数え歳）。まだ、頭頂のけしぼう芥子坊をいちようまげ銀杏鬚に結う年頃だが、お花は無造作に伸ばした髪を後ろで束ねているだけである。それでも、色白のふつくらしたほお頬やくろめ黒眸がちの目は可愛かった。その色白の顔が朱をは刷いたように赤らみ、額にうつすらと汗が浮いている。

そこは、神田豊島町にある一刀流中西派の千坂道場だった。

四ツ（午前十時）ごろである。道場内には、お花の他に母親の里美と彦四郎がいた。それに、居残り稽古した門弟が三、四人、道場のつづきにある着替えの間にいるはずである。

里美も、木刀を手にしていた。いつとき前まで、お花といっしょに木刀の素振りをしていたのだ。

里美は刺子の筒袖に股だちをとった黒袴、剣術の稽古着姿である。髪は後ろで束ねて玉結びにしていた。

里美は武家の妻のように眉を剃ったり、鉄漿をつけたりしなかった。男のような勇ましい恰好だが、顔は色白で形のいい花弁のような唇をしていたし、胸や腰には女らしい膨らみもあった。里美は二十代半ばだった。稽古着姿に身をつつんでも、若妻らしい色香が残っている。

道場主の娘に育った里美は、子供のころから道場を遊び場にして男たちといっしょに剣術の稽古をつづけてきた。やがて、思いを寄せた彦四郎の妻になり、お花が生まれると剣術から離れ、子育てに専念するようになった。

ところが、ちかごろお花に手がかからなくなったせいか、里美はお花といっしょに道場に立つようになったのである。

「花、茶巾ちやきんを絞るようにな」

彦四郎が、お花に声をかけた。手の内を絞ることで太刀筋たちすじがまっすぐになり、振り下ろしたところで木刀をとめられるようになる。

彦四郎は、三十がらみだった。里美といっしょになったところは、役者にしてもいいような男前だったが、優男やさおとこで頼りないところがあつた。ところが、剣術の修行をつづけてきたせいか、道場主らしい威厳と剣の遣い手らしい威風がそなわつてきた。それに、お花のよき父親でもある。

「はい！」

お花は、ヤツ、ヤツ、と気合を発しながら木刀を振りつづけた。

着替えの間から、門弟の川田清次郎かわたせいじろう、若林信次郎わかばやしんじろう、佐原欽平さばらきんぺいの三人が道場に出てきた。いずれも若い門弟で、御家人の子弟である。

三人は小袖に袴姿で、手に劍袋けんぶくろを持っていた。劍袋のなかには、竹刀と木刀が入っているはずである。

「お師匠、これで帰らせていただきます」

三人のなかでは年嵩としかさの川田が、彦四郎に声をかけて道場から戸口に出た。

そのとき、引き戸をあける音がし、戸口の方で人声がした。だれか、道場に入ってきたらしい。川田たちが、来訪者と話しているようだ。

すぐに、川田が道場に引き返してきた。

「お師匠、入門者のようです。それも、ふたり」

川田の声には、昂たかぶった声のひびきがあった。門弟たちは、新しい門人に興味をもつ。若い門弟は、特にそうである。

「そうか。ここに、通してくれ」

彦四郎は、お花と里美に目をやり、「聞いた通りだ、稽古はこれまでにしてくれ」と声をかけた。

「はい」

お花は、すぐに木刀を下ろした。目が戸口にむけられている。お花も若い門弟と同じように、入門者に興味をもったようだ。

「花、母屋おもやに行きますよ」

里美が、お花をうながした。

家族の住む母屋は道場の裏手にあり、短い渡り廊下でつながっている。お花は里美に手を引かれ、廊下のある方にむかいながら、しきりに後ろを振り返った。

そのお花の姿が、師範座所の脇にある母屋につづく廊下に消えたとき、道場に男たちが入ってきた。道場を出たばかりの川田たち三人と、ふたりの武士だった。ふたりの武士は、羽織袴姿だった。鞘さやごと抜いた大刀を、手にしている。歳はふたりとも、二十代半ばに見えた。御家人か江戸勤番の藩士といった恰好である。

彦四郎が師範座所を背にして道場の床に座ると、ふたりの武士が彦四郎の前に膝ひざをおり、川田たち三人は、ふたりの武士からすこし間を取って後ろに腰を下ろした。川田たちは殊勝な顔をして居並んでいる。

「川田たち、帰らなくていいのか」

彦四郎が声をかけた。

「はい、何か御用があるかもしれませんが残りしました」

川田が言うと、他のふたりもうなずいた。

「そうか」

彦四郎は笑みを浮かべただけで、それ以上言わなかった。川田たちの魂胆は分かっていた。ふたりの入門者の名や身分を知りたいのである。

「千坂彦四郎だが、そこもとたちは？」

彦四郎がふたりに目をむけて訊いた。

「出羽国、島中藩、瀬川達之助にございます」

大柄で、がっちりした体軀の武士が名乗った。眉が濃く、眼光がするどい。剽悍ひょうかんそうな面構えである。

「それがしも島中藩士で、名は坂井順之助にございます」

中背の武士が名乗った。面長で、目の細い男だった。

「それで、用件は？」

彦四郎は島中藩を知っていた。もつとも、島中藩は七万石で、藩主の名が木暮土佐守直親さのかみなおちかということぐらいである。

「門弟にしていただきたく、罷り越しました」

瀬川が言うと、

「われら兩名は江戸詰を命じられ、定府するようになって一年になります。やっ

江戸での暮らしが落ち着きましたので、一刀流を修行したいと思い、道場を探しておりました。そのようなおり、長く江戸詰をしていた者から、一刀流なら千坂先生の道場がよいと聞き、訪ねてまいった次第です」

坂井が話した。

「なぜ、一刀流を？」

江戸には一刀流の他に、神道無念流、直心影流、鏡心明智流、心形刀流などの名の知れた大道場がいくつもあつた。

「われら、国許くにもとにいるとき、一刀流の道場に通つておりましたが、修行の途中で道場を離れることになりました。国許を離れるときから、江戸での暮らしが落ち着いたら、一刀流を修行しなりたいと思つていたのです」

坂井によると、島中藩の城下には、一刀流と鬼齋流きさいりゅうなる流派の道場があるという。鬼齋流は、寛永のころ鬼齋なる法師が廻国修行のおりに島中藩に立ち寄り、山岳の地に籠こもつて修行して会得した流派といわれている。剣けんだけでなく、槍やり、鎖鎌くさりがま、柔術なども指南する道場で、主に領内の郷士ごうしや一部の藩士の子弟などが通つていふという。「それで、住居すまいは？」

藩邸のある場所によっては、道場に通えないのではあるまいか。

「われらふたり、日本橋馬喰町ばくろちやうの借家に住んでおります」

坂井によると、借家は町宿だという。

町宿とは、藩邸内に入りきれなくなった江戸詰の藩士が、江戸市中の借家などに住むことである。

「近いな」

馬喰町なら、道場に通うのにも楽である。瀬川と坂井は道場に通うことも考えて、千坂道場を選んだのかもしれない。

「なにとぞ、われらふたりの入門、お許しただきたい」

瀬川と坂井が、両手を床について頭を下げた。

「しばらく、通ってみるといい」

彦四郎は、ふたりの入門を拒むつもりはなかった。

「ありがとうございます」

ふたりが、声をそろえて言った。

彦四郎は川田たち三人に、

「ふたりに、道場のことを話してやってくれ」
と言い置いて、腰をあげた。

2

道場内に、気合、木刀を打ち合う音、床を踏む音などがひびいていた。門弟がふたりずつ三組に分かれ、一刀流の型稽古を行っていた。型稽古とは打太刀うちだち（指導者）と仕太刀しだち（学習者）に分かれ、型の決まった様々な一刀流の刀法を学ぶ稽古法である。

いま道場に立っている三人の打太刀は、師範代の永倉平八郎ながくらへいはちろう、高弟の三村寛兵衛むらかんべえと島津勝左衛門しまづかつざえもんだった。仕太刀は三人とも若い門弟だった。他の門弟たちは道場の片側に居並び、見取り稽古をしながら順番を待っている。

見取り稽古というのは、上級者の太刀捌きたちさばや間合の取り方などを目で見て学ぶことである。

一段高い師範座所には、彦四郎と千坂藤兵衛とうべえの姿があった。藤兵衛は彦四郎の義

父で千坂道場をひらき、長く道場主として門人たちの育成にあたってきた男である。還暦にちかい老齡であったが、一刀流の達人で、いまもその身边には劍の達人らしい威風がただよっている。

藤兵衛は彦四郎に道場を継がせて隠居した後、道場から離れて暮らしていることもあり、稽古場に立つことはほとんどなくなったが、ときおり道場に姿を見せて、師範座所から門弟たちの稽古を眺めている。

「彦四郎、また門弟が増えたようだな」

藤兵衛が目を細めて言った。

道場内には、三十数人の門弟たちがいた。一年ほど前までは、二十人半ばの門弟で稽古をすることが多かったのだ。

「はい、このところ入門者が増えまして、一昨日も江戸詰の藩士がふたり、五日ほど前には御家人の次男がひとり、入門しました」

彦四郎は、藩士の瀬川と坂井、御家人の上田寛次郎うえだ かんじろうのことをかいつまんで話した。

「門弟が増えるのは、いいことだ。……稽古にも、活気が出る」

藤兵衛が目を細めて言った。

そのとき、「頼もう！」と道場の戸口で男の声がひびいた。だれか、道場に訪ねてきたらしい。

戸口近くにいた川田と木村助三郎きむらすけさぶろうが立ち、慌てた様子で戸口にむかった。

すぐに、川田と木村は道場内にもどり、道場の隅に居並んでいる門弟たちの後ろを通過して、彦四郎の前に来た。

「お師匠、武士が三人、戸口に来ております」

川田が、顔をこわばらせて言った。

「何者だ？」

川田の顔色からみて、門弟志願者ではないようだ。

「わ、分かりません。一手、御指南を仰ぎたいと申しております」

「道場破りか！」

彦四郎の顔が、けわしくなった。

藤兵衛は無言だったが、穏やかそうな顔がひきしまり、双眸そうぼうに剣客らしい鋭いひかりが宿った。

「ど、どのようにいたせば……」

川田が声をつまらせて訊いた。

「義父上、どうしますか」

彦四郎が訊いた。

「追い返すわけには、いくまいな」

藤兵衛が、低い声で言った。

彦四郎はすぐに、師範座所から稽古場に下りて、師範代の永倉のそばに行つて耳打ちした。

「稽古、やめ！」

永倉が、道場内にひびき渡る大声を上げた。

川田と木村につづいて、道場内に姿を見せたのは三人の武士だった。ふたりは羽織袴姿で、剣袋を手にしていた。ひとりには、六尺はあろうかという巨軀きよくで小袖に袴姿だった。大刀だけを提げている。戸口で、腰に差していた刀を手にしたのだろう。道場内は、水を打ったように静かだった。道場の両側に居並んだ門弟たちは、息をつめて姿を見せた三人の武士を見つめている。

三人は道場のなかほどに立つと、師範座所を前にして腰を下ろした。

「名をうけたまわろうか」

彦四郎が、三人の真ん中に座った中背の武士を見つめて誰何すいかした。

面長で、頤おとがが張っていた。三十がらみであろうか。首が太く、胸が厚かった。武芸の修行で鍛えた体らしい。黒ずんだ薄い唇をしていた。彦四郎にむけられた双眸が、猛禽もうきんのようにひかっている。

「重村長右衛門しげむらおさえもんでござる。一手、ご指南いただきたくまかりこしました」
重村が低い声で言った。

「流は？」

「決まった流はござらぬ。重村流と置いていただきたい」

つづいて、重村の左手に座した長身の武士が、

「それがしは、枝野権八郎えだのごんはちろう。……枝野流でござる」

と、口許に薄笑いを浮かべて言った。丸顔で、細い目をしている。

もうひとり、巨軀の男は無言だった。赭黒あかぐろい顔で、ギョロリとした目、小鼻の張った大きな鼻をしていた。閻魔えんまを思わせるような巖いついで顔である。

「そこもとの名は」

彦四郎が誰何した。

「大河内源十郎。……無手勝流だ」

大河内が、胴間声で言った。

「無手勝流だと。……そこもとたちは、指南が所望だそうだが、当道場は他流試合を禁じている。重村流も無手勝流も他流であれば、立ち合うことはできぬ」

彦四郎は、胸の内の怒りを抑えて言った。

「それがしは、ご指南をいただきたいと申したはず。われらの望みは、立ち合いはござらぬ。稽古をつけていただければ、それで結構」

重村が嘯くように言った。

「ならば、門弟たちといっしょに型稽古でもしていただくこうか」

彦四郎が語気を強くして言った。

「型稽古は結構。……聞くとところによると、御道場は試合稽古もしているそうではござらぬか。われらは、試合稽古を所望いたす」

「断ったら」